

---

月の光に恋歌を 番外編5 『初恋 から騒ぎ』

きつねこぶた

---

## 注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

### 【小説名】

月の光に恋歌を 番外編5 『初恋 から騒ぎ』

### 【Nコード】

N1783E

### 【作者名】

きつねこぶた

### 【あらすじ】

架空の中華風の国、項貴国。新婚の甘い日々を送る龍焰と麗華姫。ある夜、二人の心に、せつないさざ波がたつてしまう。ムーンライトノベルズ投稿作品『月の光に恋歌を』の番外編です。

項貴国に静かな春の宵が訪れた。

都でも一、二の規模を誇る翠家の本邸。

若い新婚の夫婦は一日の仕事を終え、就寝までのくつろぎを楽しんでいた。

甘い蜜月を楽しむ二人には、どんなことでも薔薇色に見えるほどでも時にはちよつとした棘によって、心傷つけられることもあったのだが。

「麗華様の初恋の人って、どんな方なんですか」

ことの起こりは、その無邪気な質問から始まった。

つい最近麗華のところには仕えることになった とうか、お仕えしたいと押しかけてきた下女 美耶が、単なる好奇心で問いかけたのだ。

首をかしげる翠家の若奥方 麗華に、美耶は続ける。

「今、けっこうみんなの間で、そんな話題が出るんですよ。初恋の人ってどんな人だったのかって」

みんなとは、使用人たちの間で、ということだろう。

わたしも聞かれちゃったんですよ、とはしゃぐ彼女に、うーんと麗華は考え込んだ。

「やあね、美耶。そんなのに興味あるわけ？」

横でくつろいでいた麗華の夫 凰 龍焰が茶化す。

「この子の初恋なんて、決ってるじゃない、あたしに」

「え？」

「あら、そうなんですか、麗華様」

「……」

何て言うべきか、麗華は困った。

（ちゃんと結婚を意識したのは、もちろん龍焰様が初めてだけ……）

美耶の聞いているのは、初恋。

彼に会うまでの十五年間、一度もそういうときめきを持ったことがないように思われるのは、ちょっと悔しいものがあった。

龍焰は、余裕の笑みを浮かべて続ける。

「そうよ。大体この子が、あたし以外の誰に心を奪われるっていうわけ？ あたしと出会ったときなんて、ほんと女の子なの、あんだ、って言いたくなるぐらいの格好だったしね。恋を経験した女の子っていうのは、もっとこう綺麗になってるものよ」

麗華の顔色が、少し変わった。

二人とも彼女の変化には気付かずに盛り上がってしまった。

「えー、それ、ほんとですか、龍焰様」

「そうよ、あなたにも見せたかったわ」  
にやりと笑う龍焰に、麗華はそばにある水差しをぶっかけてやりたい気になった。

（何よ何よ何よっ！ そこまで言わなくなっただっていいじゃないっ）  
確かに彼と出会ったとき、自分とはんでもない格好だった。でもしかたなかったのだ。

山賊と一戦交えて、道にも迷い、やっと見つけた小さな泉には落っこちるし。

「そんな子が、どこの誰に恋をするっていうわけ？ 恋する乙女ってのはね、いくら普段はお転婆でも、その時だけは可愛くなるものよ。それなのにこの子ったら あたしと出会って、やっと少しは女の子らしくなっただってどこかしらね」

「そういう龍焰様の初恋は、どんな方だったんですか」

美耶の罪のない質問に、麗華の心は突然ズキンとなった。

（龍焰様の、初恋の人……）

くすくす笑いながら、龍焰は答える。

「美耶ったら、そんなの知りたいわけ？」

「だあって興味ありますよ。龍焰様、かっこいいもの。さぞ素敵な姫君と恋を経験されたんじゃないかしらって　ね、麗華様」

「え？　え、ええ」

複雑な顔で、麗華は答えた。

胸の奥がずきずきと疼いて、声を出すのも何故か苦しくなる。

「ね、初めて接吻された姫は？　どんな方だったんですか？」

「え？　初めての接吻って……」

今度は龍焰の顔が、さつと変わる。

なにやら難しい表情で、彼は一瞬瞳を閉じた。

（龍焰様？）

「どうされました、龍焰様？」

麗華も美耶も、突然の彼の表情に首をかしげる。

なにやら考え込んでいた龍焰は、はつと顔をあげた。

「え？　ああ、別になんでもないって。それよりそうねえ、あたしの初恋かあ。一体どれかしらね」

「そんなにたくさんの方と、恋に落ちられたのですか」

「ま、まあね」

わざとらしく微笑み、彼は曖昧に答える。

「ぜひ聞かせてくださいな。いいでしょう？」

「……」

「……」

無言で答えない彼に、麗華もあることを思い出し、背筋が寒くなつた。

（まさか龍焰様の今までの恋のお相手って　　）

想像したら、思わず頭はくらくらと眩暈を起こす。

自分が龍焰と会ったときにも、彼は恋の真っ最中。

しかしその相手というのは　女の子ではなかった……。

さすがの龍焰も具体的な答えは返さず、笑って、教えない、と舌を出す。

「えーっ、ひどいですよ、龍焰様、教えてくださいよ」

「駄目。こういうのはね、自分の心の奥深くに、思い出としてきちんとしまっておくものなのよ」

「そうなんですかあ」

納得いかなげな美耶の矛先が、麗華に向いた。

「じゃあ、麗華様は？ やっぱり龍焰様が初恋の方だったんですか」

麗華は、さつきぼろぼろに言われた仕返しを仕返しをしてやりたくなる。

（何よ、あたしだって、恋の一つぐらいあるわ）

「うっん、あたしの初恋は、龍焰様と会う前よ」

「ええっ、本当に？ じゃあ初めての接吻も、その方と？」

「え……うん」

龍焰がどんな顔をしてるかしら、と麗華は気になりながらも答えた。

彼の方を伺い見ると、さっと読みかけの書に顔を隠している。

（ちよっとは妬いてくれたかな）

彼は、実はかなり嫉妬深いことを、麗華はよく知っていた。

でも龍焰の表情からは、何もわからない。

少しがっかりしながら、彼女は明るく、もう下に戻りなさいな、と美耶に言い、話を終わりにした。

二人きりになると、沈黙が続いた。

麗華はため息をつき、鏡の前に座る。

今日も一日が終わり、あとはもう少ししたら寝るだけだ。

髪をほぐして梳かすと、着替えようと寝室に入る。

（ちよっと早いけど、もう休もうかな）

麗華は、彼が気に入ってる薄桃色の寝衣を手を取った。

着替えようと帯をほどくと、背後から突然ぎゅっと抱きしめられる。

いつの間にか、彼が入ってきていたのだ。

「龍焰様」

「……怒ったの？」

「え？」

「さっきあたしが、あんなこと言ったから あんた怒ったわけ？  
そうでしょ？」

「……」

「だからあんな嘘、言ったんでしょ？」

「嘘？」

「あたしの前に、あんたが好きになった人がいるって  
彼の声が震えているのを感じ、麗華は胸がときどきした。

（やだ、龍焰様ったら）

やっぱり気にしてくれてるんだ。

そう思うと、体中が熱くなった。

「ねえ、そうなんでしょ？」

「……」

「それとも、本当にいたの？」

「……うん」

麗華は迷ったが、嘘をつけなくて、うなずいた。

「そう」

悲しそうにつぶやくと、龍焰は手を離す。

「龍焰様？」

「今日は、あっちで寝るわ。目を通したい書がたまってるし」

（ええっ）

彼の拒否反応に、今度は麗華の方があせった。

「ちよつとっ、龍焰様、あの、その、あたしのこと、嫌いになっ  
ちやっただの？」

「馬鹿ね、そんなわけないでしょ」

彼は笑って、彼女をこずく。

「あんたにもそんな過去があったって当たり前じゃない。世の中に

は、男はあたしだけじゃないんだし」

「……」

「ましてあなたは後宮に上がってて、たくさん素敵な若君と交流してたわけだしね。気になる男の一人や二人、いたっておかしくないでしょ」

（後宮では、男の人なんかと会えるわけないんだけど……）

思わず突っ込みそうになったが、彼女は言葉を引っ込めた。

寂しそうな彼の笑顔に、麗華は胸が痛くなる。

（傷つけちゃったかな。どうしよう）

龍焔が背を向けて、去っていきこうとしたとき、彼女は背後からぎゅっと抱きついた。

「やだ」

「……麗華」

「行かないで、行っちゃ嫌っ」

「あんたねえ」

「お願い、あたしの言葉は取り消すから　ね、行かないで、今夜も一緒に休んで」

「それじゃあ、どっちが嘘か、わからないじゃない」

「……」

「そんな顔しない。とにかく今日は、一人で休むわ。考えたいこともあるし」

いいわね、と強い口調で言われ、すがりついた麗華の手は宙に留まった。

龍焔は彼女を残し、寝室の扉を閉めて、出て行ってしまった。

一人寝台に横になりながら、麗華の心は揺れていた。

龍焔の態度がどうしても気になる。

（龍焔様、やっぱり怒っちゃったんだわ）

自分だけを愛していると思っていた姫に、忘れられない男がいるなんて。

(そういえば龍焰様、初めて接吻した姫のこと聞かれて、変な顔してたわね)

眠れずに、麗華は寝台から起き上がる。

(きっと男の人じゃない。女の子だわ)

直感でそう感じ、麗華も胸が苦しくなった。

どんな少女だったのだろう。

彼が初めての想いを捧げた姫は。

相手に、そういう思い人がいたと感じるほど、心の中はせつない感情で満ちていく。

過去のことだと 気にする必要はないと思っても、どうしてもこのもやもやは止まらない。

(そんなの、あたしだって良い気持ちじゃないわ)

彼だってきつとそうだろう。

今頃、枕に顔をうずめ、何を考えているのだろうか。

こんな気持ちのまま、二人別々に夜を過ごして、明日の朝、笑って挨拶が出来るのか いつものように。

(どうしよう。このままじゃきつと……)

このまま休んではいけないと感じ、麗華は寝台を降りて、寢室を出て行った。

麗華の寢室から自分の寢所に戻った龍焰は、そのまま寝台に寝転ぶ。

心は当然のごとく嵐が吹き荒れ、おだやかではなかった。

(わかってる。あの子だって、過去に好きな男の一人や二人、いたっておかしくないわよ。候家の姫だし、まして後宮に)

彼はよく知っていた。

麗華が、皇帝陛下に想われていたことを。

都に来て、翠家の跡取りとして彼は殿上し、陛下にお目通りした。そのとき皇帝陛下が、自分に向けた視線がどんなものだったのか、痛いほどよくわかっている。

(まだ陛下は麗華のことを )

本当なら、自らの手で幸せにしたかった姫なのに。

自分には出来ないことを成してしまった 愛する姫の心を奪い取った男に対する多少の嫉妬、そして寂しい心情を、ひしひしと感じたのだ。

陛下には剣の試合も挑まれた。

お相手したときの陛下は、いつものおだやかな陛下とは、まるで違っていた。

「龍焰、わたしを負かせ！ いいな！」

そう言うなり、皇帝は彼に本気で挑んできた。

何度か打ち合い、戸惑う彼に、斎陽帝は震える声で叫ぶ。

「本気で来い。わたしを皇帝と思うな。手加減などしたら許さん」  
「陛下」

「お前が本当に、わたしよりあれを幸せに出来る男か証明してみせろ。さもなくばわたしは」

その言葉に、龍焰はこの勝負の意味を知った。

男と男の、愛する姫への想いをかけた真剣勝負。

斎陽帝にとっては、今だに恋慕う姫を思い切るためのもの。

さもなくば、の後の言葉を考え、彼は背筋がぞつとした。

麗華の夫としてふさわしくないと判断されたら、二人は引き離されるかもしれない。

皇帝には、それだけの権がある。

(嫌！ 絶対にあの子は譲らないわ！)

龍焰の瞳に、激しい闘志がみなぎった。

彼は凄まじい反撃に出て、あっという間に斎陽帝の剣を弾き飛ばしてしまう。

後半の龍焔の勢いに、斎陽帝は驚き、油断した。膝をつき、肩で息をしながら一礼する龍焔に、心静まった瞳を向ける。

「立ってくれ。この勝負、わたしの負けだな」

「陛下」

手を差し出され、龍焔は戸惑いながらも、その手を取った。

「見事だったぞ。お前とは、良い友になれそうだ」

「そんな陛下……友などと」

「麗華がそうだったよ。あれは後宮において、身分などというものは、まったくこだわらる性格じゃなかった。今でもそうなのだろう？」

「はい」

「わたしも彼女の考え方には賛同するよ。まして今、宮中には、わたしと同じ年の貴族の若君などいないからな」

「……」

「わたしの友になってくれるな、龍焔。そしてあれを 幸せにしてやってくれ」

「陛下」

「わたしは何度も麗華に救われたのだ。彼女だけは、どうしても幸せになつてもらいたい。約束してくれ、龍焔。彼女を幸せにすると」

「……」

「君になら、彼女を託せる。どうだ？ わたしに誓ってくれるか」

「はい」

龍焔は真剣に答えた。

「わが名にかけて、お誓い申し上げます。麗華姫は、わたしが生涯かけて、幸せにしてみせます」

「ありがとう」

澄んだ笑顔で、斎陽帝は彼の手を強く握る。

龍焔も艶やかな微笑みを返し その時から二人は国の主と臣下の域を超え、心通わせる仲になった。

今では龍焔は、殿上人の中で一番陛下に近く、政もそうだが皇帝

の私生活においても、強い支えとなっている。

彼自身も、皇帝陛下は命を賭して仕えるに値する君主として、心から慕う存在になっていた。

その人柄を知れば知るほど、思いは高まっていく。

己の主が深い優しさと強い意志を持つことを感じ、とても惹かれていくのだ。

男として十分認めるに値する人　そう思うがゆえに、今、激しく心が騒ぐ。

（後宮は男子禁制の場所。そんなところに幼い頃からいた麗華だもの。男と接する機会なんて　皇帝陛下だけか）

だとしたら、やはりそうなのだろうか。

彼女も皇帝陛下のことを　。

（以前聞いたときには、違うって言ったけど）

兄のようにしか思えなかったと、彼女は自分の腕の中で話してくれた。

でも。

（あの子……本当は、あのとき一緒に後宮にいた親友の姫に、陛下を譲って遠慮して　）

麗華の過去を、龍焰は知っていた。

都に来てからは、更にあちこちから情報も入る。

（あなたの初めての接吻も、皇帝陛下が……？）

胸が痛い。

そんなことは、あってもおかしくないこと。

自分の胸の痛みは、皇帝陛下に対する嫉妬だと彼にはわかっていた。

（馬鹿ね。今、麗華の心はあたしのものなのよ。さっきだって行かないでと言った麗華のことを思い出し、龍焰はため息をつく。

（あたしって本当に駄目なのよね。こんなことで動揺しちゃって）きつと麗華は、かなり傷ついたので。

些細な事で動揺し、小さな嫉妬で彼女を傷つけてしまった。

ますます自分に嫌気がさし、龍焔は他のことに考えを向ける。

(そつえば)

自分が初めて接吻した相手の事を思い出した。

(まあつたく、不意打ちだったわよね。避ける隙もなかったわ)

まさか彼女が、あそこでああ出るとは思いもしなかったのだ。

(あたしも子どもだったし、油断したわ。といつても、あつちの方が、あたしより年下だったけどさ)

淡い思い出を脳裏によみがえらせ、ふふつと笑みを漏らした彼は、静かに開いた扉に、はつと身構えた。

「誰っ」

横に潜ませた剣をつかんで、扉の方を睨む。

「……龍焔様」

か細い声に、彼はふつと腕の力を緩めた。

「あんたなの？」

愛しい少女の声にほつとして、彼は剣を横に置く。

「まったくなあに？ 寝こみを襲うなんてあぶないわよ」

わざと茶化すと、麗華は寝台に近づいてきて、しょんぼりつつぶやく。

「龍焔様、やつぱり……一緒に寝ちゃ駄目？」

「……」

「眠れないの。気になって さつきはごめんなさい」

「何がよ。あんたがあやまることじゃないでしょ」

龍焔は息を吐き、しょうがないわねえ、と笑ってみせた。

「ほら、来なさい」

寝台の右端を空けてやると、麗華はそつと滑り込む。

少女の震える体を抱きしめると、優しく接吻した。

彼女の甘い息遣いが、先ほどまでの彼の心の苛立ちを静めていく。

(たとえ過去がどうあれ、あんたは今、あたしのものだわ)

体中に愛しさがみなぎり、龍焔は麗華抱く腕に力を込めた。

「あのね、龍焔様」

「なあに」

「あたし あたしもね、あれから考えたの」  
「何を？」

「あなたの初恋の姫のこと」  
龍焔は愛撫をやめ、目を丸くする。

「あたしの初恋の相手？」  
「うん、さつき美耶に聞かれたとき、龍焔様、ちょっと考え込んだでしょ。それを思い出して」

（あなたもあたしのように、心揺らして悩んでいたの？）  
龍焔は腕の中で目を潤ませている少女を、十分に愛らしいと感じた。

（可愛いこと。あたしの事、こんな風に気にしてくれるなんて）  
くすつと満足そうに笑みをこぼし、彼は返事を返す。

「あなたが正直に言ったから、あたしも白状してあげようかしら。  
初恋の姫のこと」

苦しそうに瞳を揺らす麗華の髪を撫でながら、彼は話を続けた。  
「でも、今思えば複雑よねえ。あれを初恋というのかどうなのか  
初めて接吻をかわした相手ではあるけどさ。あの時彼女を好きだったから、そうだったんじゃないしね」

「え？」  
「向こうから突然されちゃったのよ。もう驚いたのなんのって」  
ふふつと笑いながら、龍焔は言った。

「ねえ、こうなったらいつそ秘密にしないで、お互いの初恋のこと、話してしまわない？」

その方がすつきりすると思うし、とつぶやく麗華に、龍焔はうなずく。

「いいわよ、じゃ、あんたから」

「あのね、あたしのは、確か六歳のとき」

「六歳？ あんたって、随分ませたのね」

あきれて龍焔は、声をあげる。

「うん。それでね、あたし後宮に入ってたんだけど、お母様が病気がって聞いて、どうしても会いたくて、後宮を飛び出しちゃったの」「あんならしいわね。そんな小さい頃からとんでもないことしてかすなんて」

「もう、いいじゃない。それでね、後宮を出たのはいいけど、あたし、町の道なんてわかんなくて……迷っちゃったの。たくさん歩いたら疲れちゃって ほら、龍焰様も知ってるでしょ。あの真っ直ぐ行ったら、市場に続く道。あそこの曲がり角のところで、座り込んでんじやったのよ」

「あの角で、ですって?」

龍焰の顔色が瞬時に変わる。

麗華は不思議そうに小首をかしげながら続けた。

「そしたらね、がらの悪そうな男たちに囲まれちゃって 危機一発ってときに、とつても素敵な若君が現れて助けてくれたの。男たちを、あつという間になぎ倒して」

「……」

「それから若君は、家に帰りたくて困ってるあたしに、とつても親切にしてくれたの。あたし、本当の名前も何にも教えられなかったけど もしかして、警邏に連れて行かれて、また後宮に戻されちゃうかもしれないと思ったから あたしのこと守ってくれて、お家に帰る道まで探して、送ってくれたの。あたし、とても嬉しかった。その若君に何かお礼をしたいって思ったんだけど、子どもだし何にも持ってないし、それでね」

恥ずかしそうにしながら、麗華は告白する。

「大好きです、って言って……接吻しちゃったの。若君はびっくりしてたけど あたし、お母様にね、好きな男の人に大好きですってするものなんだって聞いてたから」

「……」

「でもね、あたし、すごく恥ずかしくなって、そのままお家に走っていつちゃって それきり彼とは、もう会えなかった。でもあた

しの心の中では、とつても素敵な思い出なのよ って、ごめんなさい。もちろん龍焔様の方がずっとずっと好きなんだけど」

あわてて言い繕う彼女の言葉に、龍焔は噴出した。

「もうあんたつたら。いいわよ、余計な気を使わなくても」

それにしても驚いたわ、と彼はつぶやく。

「え？ 何が？」

「そうよね、そういうことだったのね。あーあ、あたしも全然気付かなかったわ」

そう言つと、龍焔は麗華の髪に触れる。

「この髪、そして蒼い瞳 そうよ、同じだわ」

「龍焔様？」

「ましてあんなことしでかすなんて、あんたぐらいのもんでしょね。貴族の姫君の中では」

くすくす笑いながら、一人納得している彼に、麗華は慚然とした。

(もう、何かそんなに可笑しいのよ)

「さ、今度は龍焔様の番よ」

早く、と催促する彼女に、龍焔はいたずらっぽく聞き返す。

「ねえ、一つ聞くけど、その若君の容姿って覚えてる？」

「もちろん覚えてるわよ。黒い髪に、綺麗な紫の目をしてたわ。それにとつても顔立ちも整つてて 龍焔様みたいに」

「あたしみたいに？」

「……もう、何笑つてるのよ！」

麗華がぶつとふくれると、龍焔はますます可笑しそうに笑いながら言った。

「あーあ、あたし、自分で自分に嫉妬してたんだわ。馬鹿みたい」

「え？」

げげんそんな表情の麗華を、優しい彼のまなざしが包む。

龍焔は、彼女の髪を撫でながら、甘い声でささやいた。

「あたしが初めて接吻した相手のこと、聞きたい？」

「……うん」

「あれはね、あたしが九歳のときだったわ。父上に連れられて、都に来たのよ」

「龍焰様が都に？」

「そうよ、あちこちめずらしいでしょ。だから宿から出て、散策してたら」

思わせぶりな彼の口調に、麗華は目を瞬かせる。

「どこかの小さな姫がね、いかにも人買いみたいな奴らに捕まってるじゃない。見捨てられなくて、思わず助けちゃったのよ」

彼の言葉が耳に入るや否や、麗華は驚きで、目を大きく見開いた。

(まさか……それって……)

「その子、いくら聞いても行きたいところがあるってだけで、名前も言わなきゃ、家の名も言わない。警邏になんて行きたくないって駄々こねるしね、ほんと困ったわ」

「……」

「拾っちゃったものは仕方ないし、一人でほつとくわけにもいかないでしょ。で、なんとか彼女の行きたいところを探してあげて、これで別れられると思ったら、いきなり抱きついてきて、好きですって言われて、接吻されちゃったのよね」

「……迷惑だった？ そのとき」

震えながらの質問に、龍焰は軽く微笑む。

「さあね。突然だったから、でも最初は確かに嫌だったわよ。だって初めての接吻だったもの。あんなふうに奪われるなんて、思っ  
てなかったし」

「……」

「散々こつちを引っかけ回して、唇まで奪われて、あたしも子どもだったから、しばらく腹立ててたわ。その姫にね」

「そうだったの」

「でも不思議よね。いくつになっても、あのときのことだけは頭から消えなかったわ。そのあと女装を始めて、他の若君に心惹かれるようになっても、あの時のことだけは、何故が忘れられなくて

子どものころの甘い思い出の一つとして、あたしの心の奥に大事にしまつてあつたのよ」

まさかあんなだつたとはね、と彼はくすくす笑いながら、彼女を優しく抱き寄せる。

「運命つて不思議よね。こんなところでつながるなんて」

「そうかも。あたしも、ずっとその若君のこと忘れられなくて

綺羅にも告白されたんだけど、お兄様みたいにしか思つてないことがすぐにわかつたの」

「そうだったの？」

「あの若君への思いと、綺羅への思いは違つてて、それで……」

恥じらいながらつぶやく麗華に、愛しい想いを込めて、龍焰は接吻を贈つた。

「今度はあたしが、あなたにしてあげるわ。あのとのお返しよ」

何倍にでもして返すからね、とささやくと、彼は頬を染めた麗華に覆いかぶさり、愛撫を再開させた。

先ほどまでとは違う愛しさが高まつていく。

「愛してるわ、麗華」

「あたしも……大好き」

麗華は甘い声で答えると、彼の愛撫に身をまかせた。

「あのね、あたし、今、すごく嬉しいわ。あのとときの若君が龍焰様で」

「可愛いこと言ってくれるわね。あたしもあなたで良かったわ、あのお姫様が」

（たまにはこんなすれ違いもいいかも。あとでこうやって、もっと近づけるんなら）

頭の片隅でそう思いながら、麗華は彼の優しい腕に溺れ、我を忘れる。

二人の甘い夜が、始まるうとしていた。

月の光に恋歌を 番外編5 『初恋 から騒ぎ』

終  
わ  
り

(後書き)

《後書き》

こんにちは。きつねこぶたです。

この短編は、ムーンライトノベルズに投稿しています『月の光に恋歌を』の番外編です。

本編をお読みでない方には、何がなんだかかわからないと思います  
が、番外編なのでご容赦くださいませ。

それにしても 美耶ちゃんを殴り倒したいと思ったのは、わたし  
だけではないはずだ！

いや現実、甘い新婚初期の夫婦に面とむかって、こんな爆弾質問  
をする使用人なんて、そういないことでしょう。

ありえない展開ですが、二人の心に波をたてるため、美耶ちゃん  
にちょっかいを出してもらいました。(そうしないとお話になりま  
せんし)

書きたかったのは、二人が過去、出会っていたのだという事と、  
龍焰様と皇帝陛下の麗華姫をかけた勝負です。

二人の出会いは、番外編『初恋』に書いてあります。

当初の予定では、この二人は生涯、互いに幼い頃の出会いを知ら  
ないままでいるつもりでありました。(読者の方だけ知ってるぞ、  
という方が面白いかと思いましたが)

でも二人がこのことを知ったときのエピソードが読みたいという  
ご意見もありまして、創り上げた作品です。

元々新婚さんだから、最後は結局甘く終わりました。(これって  
許容範囲ですよ。18禁に触れないぐらいの……大丈夫かな)

最後までご一読、どうもありがとうございました。

月の光に恋歌を 番外編5 『初恋 から騒ぎ』

きしねいぶた拝

# 広告募集中

小説関連広告に最適です。  
出版社や印刷会社はもちろん、  
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1783e/>

---

月の光に恋歌を 番外編5 『初恋 から騒ぎ』

2009年3月24日09時27分発行